

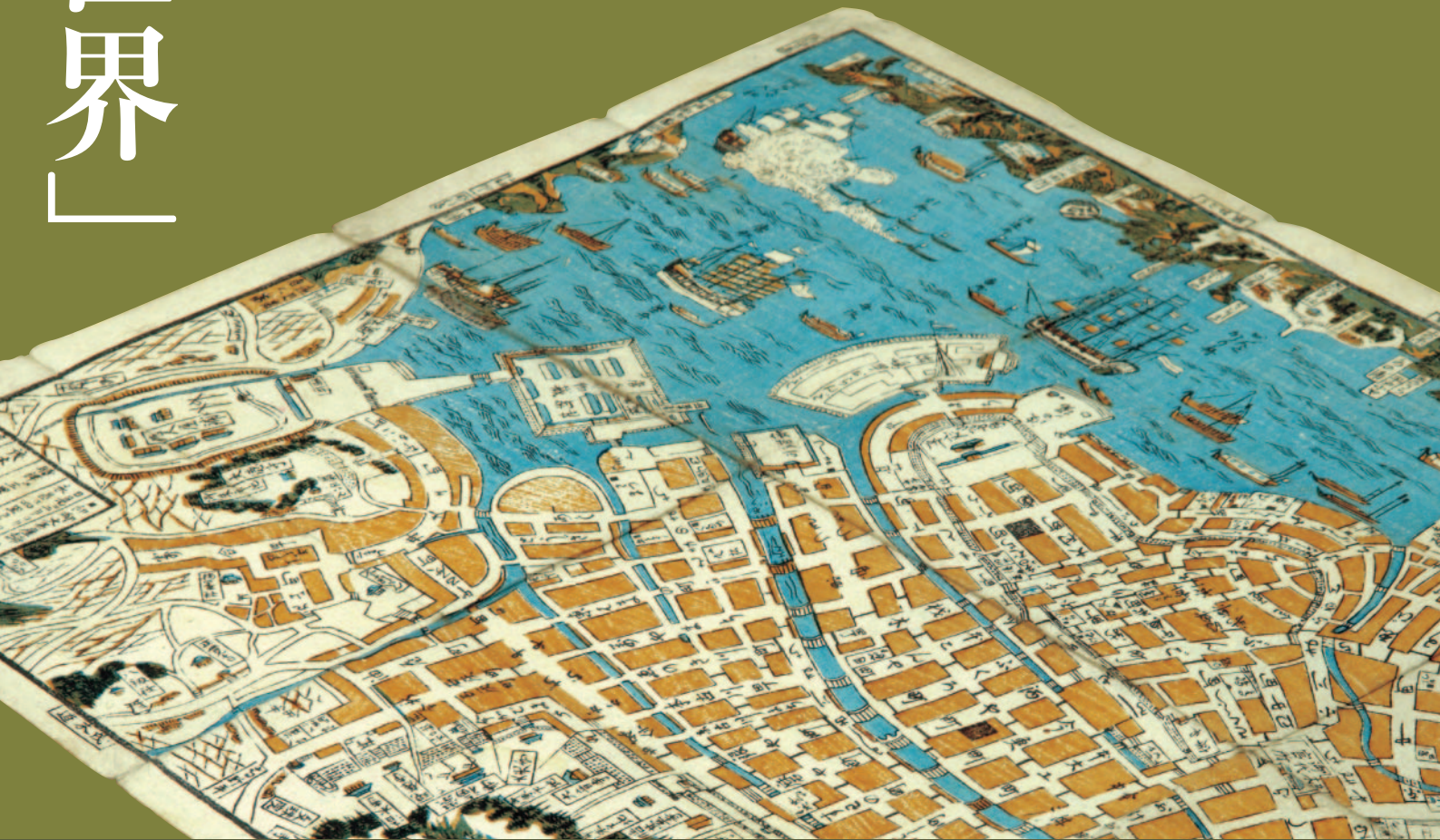
平成18年10月29日(日) ▶ 11月5日(日)

香川大学附属図書館3階
神原文庫展示室



香川大学附属図書館一般公開行事
神原文庫地図資料展

「江戸知識人の 見た世界」



香川大学附属図書館
2006



香川大学

神原文庫の一般公開にあたって

香川大学附属図書館では、平成7年図書館の3階に「神原文庫展示・収蔵室」が設けられたことなどを記念して、図書館の一般公開行事を定例化することを始めました。今年の平成18年はその第12回目になります。

当館の宝であります神原文庫は、旧香川大学初代学長 故神原甚造先生が収集された膨大な蔵書類の寄贈を受けて整理・保管してきたものです。

神原文庫の特色は、江戸時代後期から明治初期にかけて、日本が鎖国時代から広く世界に扉を開き、西欧諸国の先進文化を吸収して急速に成長を遂げた時代を如実に示している文献資料です。資料は幅広くあらゆる分野に渡っており、和洋書籍類、創刊号雑誌、錦絵新聞、錦絵版画、地図、さらには日本の中近世社会を窺わせる古文書などが含まれています。

今回の第12回目の一般公開では「江戸知識人の見た世界」と題して、鎖国下にあった江戸時代の地図を中心に展示いたします。神原文庫の中から、77点を選んで展示し、経済学部の稲田道彦教授に解りやすい解説を付けてもらいました。

現在のように飛行機や宇宙船もない時代に、しかも外国との出入りを閉ざされていた鎖国の時代に、日本人がどのようにしてこのような正確な知識を得て、全世界の地図を書き上げたか、ご覧になられた方々は驚愕されると思います。小さな地図から巨大な地図まであります。官製地図や民間人が描いた地図、時代によって異なる地図など比較しながら、300年前の時代に思いをはせてご覧になれば大変興味深いものと思います。今日、日本は領土問題でも周囲の国々ともめています。領土の歴史を考える上でもまた興味深いものです。

香川大学は今この貴重な「神原文庫」を次の時代に残せるように、修復とデジタル化を進めていますし、毎年のように国内外からの展示要請に応じて、資料の貸し出しを行っています。多くの市民の方々が展示品をご覧になられ、我々の先人の偉大さを実感していただき、香川県にもこのような貴重な宝があることに誇りを持っていただければ幸いです。

最後になりましたが、旧香川大学初代学長 故神原甚造先生のご令孫 神原夏樹氏には、文庫保存のために毎年のご援助を続けていただいています。この場をお借りして深甚なる感謝の意を表したいと存じます。

平成18年10月

香川大学附属図書館長

前田 肇

目 次

はじめに	1
展示を見ていただく方のために	2
I. 長崎市街の地図	6
II. 長久保赤水の原図による地図	6
III. 蘭学により得た知識を書き込んだ外国の地図	7
IV. 長崎の街絵図	9
V. 明治初期に作られた外国地図	10
VI. 大型の地図	11
VII. 掛け地図	12
VIII. 外国を紹介した書籍	14
IX. 当時の絵画出版物	19
図 録	20
香川大学附属図書館一般公開行事【神原文庫資料展】開催一覧	30

はじめに

稲田道彦

江戸時代の鎖国政策下の日本人の生活を考えてみてください。多くの日本人にとって、生活は自分たちが暮らしている地域社会である、藩という単位で完結していました。その外の世界を知るチャンスは多くの人には訪れませんでした。自分たちの生活世界の外に、他の藩があり、それらを包含する地域の総体としての日本という国があること、その外に日本という単位と相応する地域社会の、外国という地域があり、それらが集まった世界という地域社会があるということは想像できましたし、時折来訪する外国人により、その存在を確実に知っていました。

日本とは違う国々があるということは、知識として知っています。でも誰も行ったことがない国やそこに住む人をどのように想像したのでしょうか。外国から伝えられる断片的な知識を日本人が、自分たちの住んでいる世界をもとに想像し、構成していったと思われまます。また、この時代において地図の持っていた意味も考えてみてください。地図は断片的な知識ではなくそれらが組み合わさった構造として表すことができる、言い換えれば世界像を示していると言えます。国と国の位置の関係や、それがどういう場所であって、どういう地名があり、どういう人が住み、どんな生活をしているのかを示すことができる一つの方法です。ですから、世界知識を地図という、ひとつの構造として示すことは、並大抵のことではありませんでした。誰も行ったことのない世界を自分たちが持っている知識で再構成して人々に見える形で提示するのですから。よっぽどの想像力と注意深さと知識の探求力が必要とされたことでしょう。

誰も外国に行ったことのない時代の日本の人々がどのように自分たちがいる世界と、そしてその外に広がる世界を、どのように想像したのでしょうか。現在、私たちは科学の進歩によって正確な世界の知識を得ています。その知識を元に当時の人々の知識をはかってみてください。たいしたものではありませんか。ここには江戸時代の末期に暮らした知識人が、世界を想像した結晶とも云うべき知識群が示されていると思います。

江戸時代の日本人の生活を想像しながら、私たちもその時代や地域に暮らす日本人の知的な好奇心を眺めてみてください。いくつもの発見があると思います。

● 展示を見ていただく方のために

今回の世界地図の展示は、次のような考えで配列を考えました。地図の大きさや形状により展示する場所が限られますので、同じ時代や、同じ意図の地図を集めるという主旨をゆがめることをまずお断りしておきます。

まず、第一室で長崎の市街地図を見てもらいます。この地図は非常に大型の地図で、同種のものを探しましたが、他では見つけることができませんでした。神原甚造先生もこのコレクションを貴重なものと考えられていたようで、自分の主な所蔵品の中に書き上げていらっしゃいます。長崎を知っていらっしゃる方は、今は海岸が埋め立てられたり住宅地が東北西の方角にのびて、この地図に書かれた当時の様子に変化していることが観察されると思います。現在の市の中心地にあたる場所でしょうか。探せば新たな発見がいくつも得られる可能性を持った地図です。



次に展示ケースによる展示を見て下さい。江戸時代の人々が広く世界として知っていた、長久保赤水（ながくぼ せきすい）の発案になる地図とそのバリエーションを見てもらいたいと考えています。この地図を作る元になったのは、16世紀末から17世紀初頭に中国にやってきた、マテオ・リッチ（Matteo Ricci, 1552年10月6日～1610年10月6日）というイタリアの宣教師が作った地図です。彼は中国名を利瑪竇（りまとう）と名乗り、中国皇帝に仕えながら、当時の西洋の宗教や知識を伝える働きをしました。彼が作った世界地図が「坤輿万国全図」（こんよばんこくぜんず）（1602）であり、この世界地図は漢字で書かれていることもあり、東アジア各国に、当時のヨーロッパで保有されていた最新の知識がこの地図により伝えられたと思われます。この地図を参考にして、日本でも幾つかの地図が作られました。最も数多くこのタイプの地図を作製したのが、長久保赤水と彼の子孫または弟子による地図です。当時の有名な地理学者が作った地図であり、彼の名声もあって、江戸時代の比較的多数の人が手にすることのできた世界地図です。幕府や藩という公的機関の作った地図よりも人々の間に出回っていたと思われます。

次に展示するのは、蘭学という学問の姿で、鎖国のしかれた日本で、その後のヨーロッパの知識がもたらされてできあがった地図です。長崎の出島にのみ居留が許された、オランダ人がヨーロッパより運んできた学問知識が元になっています。オランダだけではなく、フランス語、英語による原本も参考にされながら、地図が作られました。大航海時代の知識により作られたマテオ・リッチの地図に比べて、二つの半球で地球を示すことや、マテオ・リッチにあった、南の大陸メガラニカが、実際の知識によってオーストラリアと南極大陸として正確に表現される様子を見て下さい。

これらが全て江戸で作製されたというよりも、地方でこれらを作製する中心地があり、そこでは外来の文化を咀嚼し、日本人のものとする当時の最新の知識の発信地がいくつもあったことにも注目してもらいたいと思います。例えば、岡山の津山において箕作一族は日本における最新の知識がストックされている場所であったように、です。

さらに次に、長崎の町絵図を展示しました。この町が全てのヨーロッパ知識の受け入れ窓口であることから、異国情緒も手伝って、長崎の町絵図が作られました。最初に見てもらった長崎市

中地割絵図との地図作製に働いた作成者の意図を読み取って頂きたく思います。

ケースの最後の部分には明治時代になって作られた世界地図を展示しました。明治になって、鎖国が解けてヨーロッパから入り込む知識によって、格段に地図の精度が上がったというよりも、江戸時代からの連続の方を強く感じられるのではありませんか。ひるがえって考えれば、鎖国時代の知識人の、世界知識を求める意欲がここまで正確な世界の情報を得ていたのかと、改めて感じてしまいます。



次に平台に、展示ケースに入らない大型の地図を示しました。

西洋知識が入る頃に、仏教の僧侶を中心に今まで彼らが持っていた仏教の世界観による世界地図です。でもよく見るとしっかりと、仏教の知識にはなかった西洋の地名やアメリカが書き込まれているのを見て下さい。次にあるのは手書きの地図ですが、当時のいろいろな地図を書くときの知識が入り込んだ不思議な地図です。

次に明治8年の日本地図ですが、今のものとの形のゆがみをしっかり見つけて下さい。明治になると格段に知識が整備されるように思われがちですが、時代の揺れ動きの中ではそうとばかりは言えなかったようです。中央のテーブルに長久保赤水の地図を展示しております。最初の展示ケースの中の地図が彼の後の時代の地図であるのに対し、この地図は赤水の出版した地図です。この地図がどのように変更されていったのかを最初の展示ケースのものと引き比べてみて下さい。

「圓球萬國地海全圖」（えんきゅうばんこくちかいぜんず）は、当時の地図で最大の大きさを持つ地図です。この地図は蘭学の知識を重んじて、自分の藩に取り入れたいと考えていた薩摩藩主が家臣に命じて作らせてものです。命じる方も命じる方ですが、主君の命を受けてこれだけの地図を作ることができた家臣の実力を感じて下さい。誰も行くことも見ることもできない外国の様子を、外国から入ってきた知識を総合して、想像力も入れてこれだけ正確な地図を作ることができた当時の地方に蓄積された学識の豊かさを見て下さい。その隣に細かな地名を書き込んだ地図があります。これはオランダの書店が出版した航海に使うための世界地図が原本です。母国での出版から5年目に日本で同じ地図が翻訳されて出版されるという日本とオランダの近さにも注目してもいいでしょう。



さらに壁面には、ぶら下げる形の地図や絵図類を展示しました。

まず、日本地図です。当時の日本人が自国の地図を描くときこういう地図になるのだらうと思わせる地図です。彼らの頭の中の日本もこういう形をしていたと思います。一般に行基図と呼ばれる形式です。隣に仏教思想による世界地図を掲げました。その次の字が読めない人のための絵による日本の国の図も見て下さい。反対の壁に移ると、林子平（はやし しへい）がオランダ人と会食する様子を自分で絵を描き、自分で版画にした絵図があります。また外国人の様子を絵で示した掛け図があります。日本にとってアメリカ大陸は未知の場所で、そこには日本人が持っていた、恐ろしい異相な外国人が書き込まれています。外国の地名や距離などを相撲の番付風に示した掛け図も一般に外国知識を広めるのに一役買ったものと思われます。



最後に書籍展示ケースに、当時の書籍群を配架しました。

まず新井白石の「采覧異言」(さいらんいげん)と、大槻玄沢らによる「環海異聞」(かんかいいぶん)、箕作阮甫(みつくり げんぽ)による「八紘通誌」(はっこうつうし)を配架しました。これらは江戸時代にあつて、正確な外国知識を日本に知らしめる大きな働きをした本です。

中のケースには林子平の「三国通覧図説」(さんごくつうらんずせつ)と付図を中心に展示しています。日本の回りにある近い異国を地図で示すことにより、その様子を日本に知らそうとした本です。それに続いて、漂流記や、日本人が得ていた外国の知識が展示されています。

最後のケースにも日本人から見た外国を紹介する本、またケンペルの「日本誌」のように、日本の様子をヨーロッパに知らせる働きをした重要な本を展示しました。これによって、正確な実際の見聞に基づく日本の様子が外国に発信されました。最後の地理の本ですが、アメリカの地理の本がそのまま、原語のまま日本で版をおこして、出版されたものです。コーネルの地理読本でも訳しましょうか。江戸末刊行と、慶應2年の出版の2冊の本です。幕末の時代にあつて、こういう英語の本をどのくらいの日本人が読むことができたのか、また読みたいと思つて購入したのか、また多分読むこともできない英語の本を出版した出版人の意図はどこにあつたのでしょうか。当時の日本における知識人の意識を感じて下さい。



そして最後に、出口に近い所の壁面に、庶民に外国を知らせる役目を果たしたと思われる色刷り版画を展示しました。外国の風俗が、どのようにして庶民に知られていったのかを示す、一つの外国文化の伝達方法だったのだと思います。



この展示を見ていただく時の、注記を申し上げます。

当時の出版物の特徴として、タイトルや、著者、発行者、発行年が書かれてなかったり、模写したものには意図的にそれらの情報が落とされているものもあります。同じ書籍で、表紙につけられた外題(げだい)と、本文の初めに記された内題(ないだい)が違うものもあります。できるだけその地図や本に書かれているタイトル名を書こうとしましたが、書かれていなくて、情報を図書館司書や私が推測したものは[]で示しております。書名等はできるだけ香川大学図書館で作製された神原文庫蔵書目録の記述に従うようにいたしました。また西暦を日本の年号の後に()で示しました。



古地図の研究者ではない解説者がここにある展示物の説明を書くために、今までに多くの研究者の書かれた学識を参考にさせて頂きました。多くの知識を以下にあげた書物から得ています。名前を挙げて感謝すると共に、さらなる知識をお求めの閲覧者の方にはぜひ、下記の書物を参考にして下さい。解説書の発行年代ごとに配列致します。



□ 引用・参考文献

開国百年記念文化事業会編(1953・昭和28)「鎖国時代 日本人の海外知識 一世界地理・西洋史に関する文献解題一」乾元社、498p.

秋岡武次郎 (1955) 「日本地図史」河出書房、217p.
織田武雄 (1973) 「地図の歴史」講談社、330p.
織田武雄 (1974) 「地図の歴史 ー日本編」講談社新書、講談社、188p.
矢守一彦 (1974) 「都市図の歴史 ー日本編」講談社、478p.
日蘭学会編 (1984) 「洋学史事典」雄松堂。
木村東一郎 (1987) 「近世地図史研究」古今書院、227p.
秋岡武次郎 (1988・昭和63) 「秋岡コレクション 世界古地図集成 世界地図作製史」河出書房
新社272p.
長崎市出島史跡整備審議会編 (1990) 「出島図 ーその景観と変遷ー」長崎市、321p.
矢守一彦 (1992) 「古地図への旅」朝日新聞社、296p.
織田武雄 (1998) 「古地図の博物誌」古今書院、350p.
山下和正 (1998) 「地図で読む江戸時代」柏書房新社、270p.
海野一隆 (1999) 「地図に見る日本 ー倭国・ジパング・大日本ー」大修館書店、197p.
三好唯義 (1999) 「図説 世界古地図コレクション」ふくろうの本、河出書房新社、139p.
大島明秀 (2004) 「『異人恐怖伝』に見られる国学者黒沢翁満の『鎖国論』受容」九州大学情報リ
ポジトリ <http://hdl.handle.net/2324/2879>より)。
早稲田大学図書館貴重資料 <http://www.wul.waseda.ac.jp/collect/yo/ae3110.html>
国際派日本人養成講座 <http://www2s.biglobe.ne.jp/~nippon/jogindex.htm>
開国図志 <http://www.geocities.co.jp/Bookend-Ohgai/3816/heisyo/s/9.htm>
貴重資料高精細デジタルアーカイブ〈徳島大学附属図書館運営〉[伊能図・世界図]
<http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/~archive/>
日本古地図学会〔東京都国分寺市南町〕 <http://www.antiquemap.jp/>
古地図リンク集 <http://www.hir-net.com/link/map/oldmap.html>

最後にこの解説書を書くのに多くの方の助力を受けました。香川大学図書館の片山恒信さん、
櫛橋一雅さん、鵜川多歌子さん、黒瀬由美子さんの方々、お名前をあげてさせていただき感謝の
意をささげます。

稲田 道彦

I. 長崎市街の地図

1. [長崎市中地割繪圖] 彩色精図 箱裏書「嘉永四年亥九月内藤安房守様御在勤堀喜八郎 若松森輔」嘉永四(1851)写 382×455cm 1 鋪 [291.93]

地図が納められていた箱の表に、タイトルの長崎市中地割繪圖、裏に作成者と作成年月日が書かれている。内藤安房守様御在勤 堀喜八郎と若松森輔である。嘉永四（1851）年亥九月に作成された地図であることがわかる。長崎中心部をこれだけ詳細に描いた地図は他に類例を見ない。この時代に作られた他の長崎の地図がヨーロッパ人の住む出島と中国人の住む唐人屋敷については、詳細に地図に書き込む事例が多いのに、本図では、輪郭は示すが、詳細は示されていない。それに対して、日本人の住宅に関しては間口と奥行きが書き込まれている。色分けは町内ごとになされているようである。主に日本人の住居を示すために作られた地図であることが考えられる。現代人にとって地図を作製するときにはまず書き込むランドマークの寺院や神社が周囲に名前だけに示されており、この地図の作製目的が長崎市内の住宅に対しての調査であったと推測される。

II. 長久保赤水の原図による地図

2. 地球萬國山海輿地全圖説 色刷 長赤水先生原稿 山崎義成補著 嘉永三(1850)刊 (高谷氏蔵板) 1 鋪 [290.38]

次の3.に展示する地図と同じ年に同じタイトルで、同じ人による出版である。2つの地図は地形の大きさや、地名、配列される位置が少しずつ違っている。同じ出版所で同じ情報によって別の版が作られ、それらが販売されたと考えられる。

3. 地球萬國山海輿地全圖説 色刷 折疊小本 長赤水(長久保玄珠)原稿 山崎美成補著 嘉永三(1850)刊 (高谷氏蔵板) 1 鋪 [290.38]

水戸長赤水先原稿とある。長久保赤水系統の世界地図である。日本の周囲の島には実在する島の名と、想像上の世界知識が描かれる。大東洋、小東洋とあるが、大東洋がアメリカの東に書かれている。鬼国、小人、夜人国の名前も見える。これらは当時の日本人が持っていた外国人に対する荒唐無稽な想像を書き表している。

4. [萬国地図] 大本 彩色 手書 [江戸] 写 1 鋪 [290.38]

大型の手書き筆者地図である。元の地図は長久保赤水の原図であると思われる。これを模写したものである。他の長久保赤水系の地図が大陸ごとに色分けしてあるのに、この地図は国による色分けがなされている。図中の地名も少し省略されるなど、一般に出回る赤水系の世界図とは異なっている部分がある。手書きによる模写の過程でそうなったのか、最初からそうであったのかはわからない。裏に萬国地図とのタイトルを書いている。

5. 萬國地球輿地全圖 色刷 折畳小本 安倍泰行撰著 嘉永六(1853)刊 (東都 鈴亭主人森桑補訂蔵版) 1 鋪 [290.38]

長久保赤水の系統に属する地図である。このタイプの地図は、卵形の輪郭として地球を写すことと、南に未知の大陸墨瓦蠟泥加（メガラニカ）が書き込まれるのが特徴である。この時代にはすでに、原図を描いた長久保赤水是死去しているのに、子孫か弟子などの影響下に同種の地図が出版されたのであろう。

6. 萬國地球全圖説 色刷 小林公峯序 [江戸末] 刊 1 鋪 [290.38]

長久保赤水（元禄14年1717～協和元年1801）が原図を書いた地図の系譜をひく地図である。世界地図の周りに各国の船の特徴が描かれている。中国のジャンクや、オランダの帆船その他に朝鮮、シャム、オロシヤに混じって、外国車船が描かれる。説明に紅毛より来るが製する地を知らず西方の島国と書かれている。幕末にはペリーが来航するが（1853年）、この図にはそのことが触れられていないので、それより前ではないか（三好唯義編著「世界古地図コレクション」76p）とも考えられている。

7. 地球萬國山海輿地全眞圖説 色刷 折畳小本 赤水長玄珠(長久保玄珠)述 [江戸末] 刊 1 鋪 [290.38]

出版年は不明であるが、周りの書き込みに嘉永七年に黒色の虹を見たとの書き込みがあるので、この頃であろうと推測される。長久保赤水の情報により同じ系統の世界地図を何種類も出版していることがわかる。

8. 地球萬國山海輿地全圖説 色刷 折畳小本 赤水長玄珠(長久保玄珠)述 [江戸末] 刊 1 鋪 [290.38]

長久保赤水系の地図である。ヨーロッパにインギリス、イスパニア、オランダ等の国名が見える。南の大陸墨瓦蠟泥加（メガラニカ）の一部に新オランダが書き込まれている。日本近海には強盗など想像上の島が描かれる。図の左隅には赤道を上に向けた地球儀の絵が描かれ、地球の形に注意が向けられる。同様の情報による地図でも少しずつ、地名が違っている。八丈島の南にある他の地図では無人島と書き込まれる島々がこの地図では強盗となっている。

Ⅲ. 蘭学により得た知識を書き込んだ外国の地図

9. 「[啁蘭新訳地球全図]の写本」 彩色 手書 [橋本惣吉] [江戸末] 写 1 鋪 [290.38]

この地図は寛政8年に出版された橋本宗吉による「啁蘭新訳地球全図」の手書きの写本である。元の図にある題名や筆者の名前が写されていないので、題名等がわかりにくくなっている。地図の周辺に地球の地理的知識の後に、世界中の地域の説明がなされている。

10. 和蘭地球全圖 色刷 折畳中本 田島柳卿 天保十一(1840)刊 1 鋪 [290.38]

田島柳卿による世界地図であるが、描かれた地図は寛政8年に出版された橋本宗吉の「和蘭新訳地球全図」とほぼ同じである。周囲の説明も橋本の説明の地誌部分を省いたものようである。両半球を示す地球図はカリフォルニア半島が島になっているなど、同時代の他の世界地図と比べると、少し前の地理知識を採用している。

11. 地球萬國全圖説覧 彩色 折畳小本 田島柳卿 写 1 鋪 [290.38]

上記田島柳卿の地図の模写である。地球を半球として円で示す地図である。完本を手書きで筆写したものである。出版された年号等は省かれている。当時の出版物がこのようにして、模写され一般に広まっていったことを知る好例である。

**12. 新訂坤輿略全圖 色刷 精図 新發田収蔵 嘉永五(1852)刊 (春草堂高木耕蔵)
1 鋪 [290.38]**

銅板着色の図である。卵形の地球に世界図を描いている。凡例に書かれているように、地球図の出版が多いが、両球図が多く採用され、卵型地図が少ないとし、マテオ・リッチの系譜を引く地図作成方法の復活を試みている。オーストラリアが一つの大陸として表されるなど、当時の最新の知識が盛り込まれている。彩色され、色で囲まれた地域がどの国の領土であるかを示している。現代人の使う世界地図とほとんど同じである。北極と南極、グリーンランドが書き込まれていない。作者の新發田収蔵は佐渡で生まれた蘭学者で、幕府に招請され、蕃書調所絵画取締役として務めた。地図をよく見ると、佐渡に自分の出身地の小さな集落の宿根木の地名が書き込まれている。

13. [世界地図] 彩色 球形図 若城治左衛門信昌 安永四(1775)写 1 鋪 [290.38]

土御門家門人若城治左衛門信昌が書いた地図である。ヨーロッパ起源の世界地図の知識と、仏教に基づく世界知識を合体させようとしている。日本の周りに大きなエゾ国や、長人国が書かれている。中華四百余州の西にはダットン国がいくつも書かれている。当時の日本人にとって、西域をダットンという用語で認識していたようである。

14. 掌中萬國圖 色刷 折畳小本 長山貫(樗園) 嘉永六(1853)跋刊 1 鋪 [290.38]

両半球で地球を示す地図である。オーストラリアが一つの南方大陸として示され、北アメリカ大陸も最新の知識が盛り込まれている。ただし北アメリカは今のわれわれの知識よりもかなり東西が狭い大陸として表現されている。

15. 萬國輿地分圖 色刷 折小本 橋本玉蘭 [江戸末] 刊 (近藤氏蔵板) 1 帖

[290.38]

地図帳の形式の地図集である。美しい色つかがなされている。日本の形はいびつであるが、世界地図の中で、アフリカ大陸やオーストラリア大陸の形が正しい測量結果によって修正されていくように、日本の形も正確になっていくプロセスの中の地図帳である。最初の「大日本国を上天置きたるの図」は面白いアイデアの図である。出版年は書き込まれていないが、三好唯義は「世界古地図コレクション」75pで安政3年(1856)の出版と紹介している。

16. 地球萬國全圖 銅版 [江戸末] 刊 16×22cm 1 枚

[290.38]

半球図で視点がちょうど日本の上にある位置から描かれた世界地図である。逆にブラジル上空にもうひとつの地図の視点はある。銅版による印刷である。年代は不明であるが、かなり正確な地理知識によって描図されている。

17. 新製輿地全圖 卷子本 紙高 36cm 天保十五年申辰南至日仙台大槻崇序 弘化元(1844)跋 箕作省吾刊 1 巻

[290.38]

凡例の最初に原本について書かれている。天保6年1835年に出版されたフランス人によるものを複製したと書かれる。天保十年尾仙台大槻崇の撰がある。箕作省吾は岡山津山の蘭学者である。義父に当たる箕作阮甫は当時の碩学で西洋知識を「八紘通誌」にまとめている。

18. [東西半球世界地圖] 色刷 1835年佛蘭西人鑲刻原図 阿部喜任(襟齊) 天保九(1838) 跋刊 (東都 丁子屋平兵衛) 1 鋪

[290.38]

幕末に出版された、世界地図である。半円で地球の両半球を示す図法は地球の形を視覚的に示すのに適していたようでこの時代に多くの地図で採用されている。

IV. 長崎の街絵図

19. 肥前長崎圖 色刷 折疊小本 享和二(1802)刊 (長崎 文錦堂) 1 鋪 [291.93]

街絵図の形式を取る。出島、唐人屋舗、新地唐人荷物蔵が描かれる。オランダ船が引船で入港している。

20. 長崎細見之圖 色刷 折疊小本 嘉永四(1851)改鑄 (長崎 文錦堂) 1 鋪 [291.93]

街絵図の形式を取る。出島、唐人屋舗が描かれる。海上にオランダ船と唐船が描かれる。

21. 長崎居留場全圖 色刷 折畳中本 題簽「瓊浦居留場繪圖」 慶応二(1866)刊(長崎
隣聖堂) 1 鋪 [326. 52]

凡例によると、長崎の居留置が3段階に色分けされている。黄色が上等、青色が中等、赤が下等である。居留地に暮らす人にも等級によってすむ場所が決まっていたなど、得られる知見が多い地図である。出島居留地と唐人屋敷が書き込まれている。東に船の修理場や解牛場が示される。海上には帆船が描かれている。

V. 明治初期に作られた外国地図

22. 地球全圖 色刷 折畳小本 題簽「藤井新助縮圖地球新圖」藤井新助校正 明治八
(1875)刊(大阪 藤井新助蔵) 1 鋪 [290. 38]

図中に明治8年と書いてある。東西の両球に分けた世界地図を示す。欄外に河川や湖沼の長さや大きさを実際の図形として示している。日本の地図で、国内はまだ旧国名によって示されている。

23. 銅刻世界地名表 銅版 色刷 折畳小本 榎木寛則譯述 明治六(1873)刊(東京 紀
伊國屋才輔・同徳蔵) 1 鋪 [290. 38]

面積や形が現在の私たちとなじみのある世界図が示されている。日本の人口は不明で面積が27万坪となっている。産物は金銀銅鉄漆絹綿布等となっている。当時の輸出品であろう。同様に世界の各国の面積、人口、産物が示されている。

24. 銅鑄萬國輿地方圖 色刷 折畳小本 松田緑山 明治四(1871)刊 1 鋪
[290. 38]

袋つきの色刷りの小本である。メルカトル図法を用いている。多くの世界の地名を書き込んでいる。

25. 地球萬國方圖 題簽「銅鑄地球萬國方圖」村上義茂撰 橋爪貫一校正 明治四(1871)
刊(東京 須原屋茂兵衛) 1 鋪 [290. 38]

地図の説明によると、明治3年1870年アメリカミッチェル氏の編述した本を翻訳したと書かれている。温度や羅針盤の偏差、潮流の方向、暗礁の位置を示し、航海者の便を図った地図であると記している。

26. 銅鑄新刻萬國輿地全圖 色刷 折畳中本 国旗入 明治四(1871)刊(東京 村上勘兵
衛) 1 鋪 [290. 38]

地図の注釈によると、明治四年刊1875年刊のオランダ書舗セ、スステルムの銅板を用いたとかがかかれている。文久元年の佐藤正養が翻訳した34.の地図と同種である。佐藤の地図よりも版の大きさを小さくしている。佐藤の地図が木版であったのに対し、こちらは銅版が用いられている。

非常に詳しい説明が書き込まれた世界地図である。山脈や航路も書き込まれている。

27. 萬國輿地全圖 題簽「掌中萬國輿地總全圖」色刷 折畳小本 石田齋圖并刻 明治六(1873)刊 1 鋪 [290.38]

一枚の世界図である。各地点からの方位が正しく示されるメルカトル図法を用いている。多くの世界地名がカタカナで示されている。

28. 官許大屋愷愷譯射号萬國地圖（東部）色刷 折畳小本 大屋愷愷譯 明治六(1873)刊（金沢 石川縣學校用出版會社）1 鋪 [290.38]

大型の地図である。東半球の地球図である。かなり正確な世界地図であり、明治6年にこの地図が石川県の学校で用いられているとしたら、当時の世界知識の正確さに驚きを感じる。

VI. 大型の地図

29. 南瞻部洲萬國掌葉之圖 折畳中本 頭陀浪華子圖 宝永六(1709)刊（文臺軒宇平蔵版）1 鋪 [290.38]

当時の東アジア世界で支持されていた仏教的世界観に基づく大きな世界地図である。世界の陸地は南に向かって細くなるという仏教的な説話を示している。世界の4大河川の源流である無熱惱池が中央に書かれている。ヨーロッパからの知識も組み込まれ、アメリカ大陸は日本の南に書き込まれている。ヨーロッパの国は島として表現されている。

30. [新訳地球周細覽] 彩色 折畳中本 [江戸中] 写 1 鋪 [290.38]

手書きの写しの地図である。地球を円で表す表現方法が導入され、新しい表記法として評価されたと思われる。しかし地球の地形は長久保赤水の世界図を意識しながら、別の要素も含んでいる。例えば、オーストラリアが地図の東端にくつつくような書き方である。また、ヨーロッパの国々が小さな島々として描かれるのは、別の系譜に属するヨーロッパの表記法の影響を引いているのではと思われる。左下の説明には光太夫の名前や寛政、延享の年号が見えるので幕末の時代に作られたと推測する。卵形世界図ではなく、半球図であることから、新しい地球の表記法を取り入れようとしている。

31. 地球萬國山海輿地全圖説 折畳大本 題簽「改正地球萬國全圖」長久保玄珠(赤水) [江戸末]刊（東都 山崎金兵衛）1 鋪 [290.38]

長久保赤水の大型の彩色地図である。この図を作製するに際して、最も参考にしたと思われるのがマテオ・リッチの作製した世界地図である。マテオリッチ（Matteo Ricci, 1552年10月6日～1610年10月6日）はイタリア人宣教師で、中国名は利瑪竇（り まとう）といった。中国において当時のヨーロッパの知識による「坤輿万国全図」（1602）を出版した。この中国製の世界地

図は日本に伝えられ、多くの同じ図法による世界地図を生んだ。長久保赤水の世界地図もこの系譜を引くものである。卵形の世界図であることと、南に道の大陸メガラニカを書き込む。長久保赤水は水戸藩の民出身の地理学者で、多くの日本の地図も描いている。ここに展示した地図は、長久保赤水の直接に監修した地図であると考えられる。彼の死後も、多くのバリエーションの世界地図が作製された。横長になったり図の周囲にいろいろの情報が書き込まれた地図である。

32. 新撰日本地圖 色刷 折置中本 秩入 明治九年三月剣峯克序 高木正勝 西野古海 著 明治九(1876)刊 (東京 十河存種) 1 鋪 [291.038]

日本の形はいびつである。明治9年の出版年次にもかかわらず、日本の形は少しゆがみが見られる。幕末には伊能忠敬の測量がすでにあつたにもかかわらず、それは用いられず、日本の形は民間に流布していた日本図が根底になったものと思われる。

33. 圓球萬國地海全圖 特大本 折置帖 色刷 石塚催高 享和二(1802)刊 1 鋪 [290.38]

蘭学に関心を持っていた薩摩藩主島津重豪（しげひで）の意を受けて家臣の石塚催高（さいこう）が作成した。木版彩色の両半球図で、世界図としては当時の日本で最大の大きさのものであつた。カリフォルニア半島を島としたり、オーストラリア東半分が未知となっているなど、当時の発表されていた地理知識を大きく参考にし、作成されている。

34. 新刊輿地全圖 特大折置帖 原圖安政四年荷蘭書舗セ・フ・ステムレルの鏤版 佐藤政養訳 文久元(1861)刊 (江戸 老皂館萬屋兵四郎) 1 鋪 [290.38]

説明の書き出しにあるように原図は安政四年1857年のオランダ書店セ、フ、ステムレルの銅版の印刷である。航海等に使われた地図であるとされる。内容が詳しく正確である。人口や温度などの世界の知識が書き込まれ、世界の知識を啓蒙する働きをしたと思われる。佐藤政養は出羽国庄内の生まれで、勝海舟門下の逸材として知られる。幕府の軍艦操練所蘭書翻訳方を務めた。

Ⅶ. 掛け地図

35. [日本古圖] 掛軸 石摺 山瀬浄阿弥作 97×100cm 1 軸 [291.038]

古い形式の日本地図である、一般に行基図と呼ばれる地図である。いくつも団子を重ねていくような地図で、各国の位置関係を知ることができる。面積や方位も考慮はしつ正しいものではない。当時の日本人に自国の地図を描きなさいといわれて、かけるのがこういう図ではなかったのかと思う。

36. なんもんぶだいしよこくしうらんのみず 南閩浮提諸國集覽之圖 彩色 折疊中本 延享元(1744)刊 (江戸 本屋青右衛門蔵版) 1 鋪 [291.038]

仏教形の世界地図の小型版である。先の地図が墨刷りであったのに対し、こちらは彩色されている。

37. おしへくにつくしどうくしう 教國盡道具集 [江戸末] 刊 1 鋪 [290]

文字の読めない人のための日本地図である。日本の国名を絵で判じものとして示している。武士が刀をさあ抜くぞというので、讃岐、粟は阿波。日に点が打ってあって銭でビゼンという具合である。

38. 世界國盡 色刷 [江戸末] 刊 37×57cm 1 枚 [290]

当時の国を相撲の番付の形で表現している。

39. [蘭人遊宴之圖] 掛軸 摺本画に「奥州仙産之奇傑林子平先生自画自刻米国人晚餐会之図」の賛 安永七年假名曆摺本を付す 安永七(1778)刊 1 軸 [724.15]

神原甚造先生自筆の説明書きがある。この図には HOLLANDER という書き込みがあるようにオランダ人の饗宴の図である。林子平自身が絵を描き、自分で版を彫り、印刷をしたようである。

40. 萬國人物圖會 [江戸末] 刊 1 枚 [280]

各国の風俗を示している。正確な知識というよりも、風聞のような知識も盛り込まれている北アメリカには多くの想像の人々が描かれている。例えば長脚国の事例である。外国には私達と違う人々が住んでいるのかという外国に対する驚きが表現されている。

41. 萬國一覽 安政四(1857)刊 47×36cm 1 枚 [031.5]

相撲の番付風に世界の国名を記したもので、国の強弱と、人口数によって、格付けされている。日本は大日本五畿七道で、琉球八丈無人島、蝦夷五畿薩が連という地名が挙がっている。無人島は今の小笠原諸島である。

42. [萬國里数鑑] 見立番付 喜楽垣蔵板 刊 52×37cm 1 枚 [031.5]

相撲の番付風に各国までの距離を表している。アジアと四大州を東西に分けている。

VIII. 外国を紹介した書籍

43. 采覧異言 新井白石 蒹葭蔵印 [江戸末] 写 1冊 [290.1]

新井白石は將軍家宣（いえのぶ）に仕えた政治家である。屋久島に潜入した、イタリア人宣教師ジョバンニ・シドッチが捕らえられ、江戸に送られてきた。新井白石は彼を尋問し、そこで得た知識を、將軍家継（いえつぐ）に献上するために、正徳3（1713）年に本書を書いた。本書は刊行にいたらなかったが、伝写されて、識者の間に広まった。彼は死ぬまで此の本の内容に手を入れたようである。この「采覧異言」の中には、シドッチ尋問の結果ばかりでなく、マテオ・リッチの「坤輿萬國全図」を参照し、オランダ人から献上され、幕府に蔵されていた、1648年のブラウの世界図をもとにオランダ人から聞き取った知識も盛り込まれている。ヨーロッパ23カ国、アフリカ（リビア）3カ国、北アメリカ13カ国、南アメリカ11カ国の地理、風俗、物産、政治事情などについて、簡素ではあるが、正しい知識が記載されている。神原先生は3種類の出版を集められている。

新井白石 5巻（正徳3自序 [江戸末] 写） 5冊 290.1

新井白石 蒹葭蔵印（[江戸末] 写） 1冊 290.1

新井白石 5巻 大槻文彦校（白石社、明治14刊） 2冊 290.1

である。当時の我が国において、この書籍が大切な書物であったことが伺える。

44. 采覧異言 新井白石 5巻 正徳三自序 [江戸末] 写 5冊 [290.1]

45. 采覧異言 新井白石 5巻 大槻文彦校（白石社）明治十四(1881)刊 2冊 [290.1]

46. 環海異聞 大槻茂質(玄沢) 絵入16巻(巻1欠) 坐本其碩蔵印 文化四自序 [江戸末] 写 15冊 [299]

この本は当時のロシアについての国家や人々の生活を記した地誌にあたる書物である。仙台の水夫の津太夫、儀平、左平太、太十郎らが江戸へ出船して逆風に遭い遭難した。そのちロシアへ漂着し、文化元年(1804)まで十二年間外国にあって日本に帰ってきた。この4人が、経験し、見聞した事跡を順序立てて記したものである。仙台藩主伊達周宗は大槻玄沢・志村弘強の二人に命じて事の顛末を詳細に質問、筆記させ、整理したもので、4人の記憶に、当時の書籍による考証を加えて書かれた記録である。

47. 八紘通誌 箕作阮甫 6巻 嘉永四～安政三(1851～6)刊（京都 勝村治右衛門等） 6冊 [290.1]

箕作阮甫は「八紘通誌」の6冊の本を嘉永4年から安政3年の間に出版している。当時のヨーロッパでは、アメリカ合衆国の独立（天明3年）フランス革命（寛政元年）からナポレオンを巡

る欧州全土の混乱などきわめて多くの出来事が起こっていた。この本では、欧州の新時勢を紹介しようとしている。本書の中で、引用または参考にした本の12の洋書の名前をあげている。当時において、これだけの本を読みこなし、ヨーロッパの地誌を書ける人は多くはいなかったと思われる。岡山県津山の医者の家系であり、箕作家からは明治になった多くの学者を輩出したことで知られる。

48. 瀛環志略 10巻 徐繼畲著 井上春洋等訓点 文久元(1861)刊 (阿陽對嶺閣) 10冊 [290.1]

この本は中国清代の徐繼畲がアメリカ人雅褥理耶蘇や他のヨーロッパ人に直接質問し、得た知識により著した世界地誌である。これを井上春洋が訓点を付けて出版したもので、阿波、江戸、大坂で出版したもので、場所を異とする幾つかの種類がある。日本版にはもとの中国の本にはないオランダ語の単語を付けたりしている。

49. 三國通覽圖説 絵入 林子平 天明六(1786)刊 (東都 須原屋市兵衛) 1冊 [292.01]

仙台の洋学者林子平の手になる。一冊の本と、5枚の地図である。内容は日本の近隣、蝦夷・琉球・朝鮮・無人島（小笠原諸島）などの位置・通交史・政治・社会・物産・国際関係などについて地図を付けて解説したものである。当時の日本人が知りえた、日本周辺の知識が盛り込まれている。序文は当時第一級の洋学者で、外国にまでその名を知られていた幕府の侍医桂川甫周によるものである。

50. 三國通覽輿地路程全圖 色刷 折畳中本 仙台林子平図 天明五(1785)刊 (東都 須原屋市兵衛) 1鋪 [291.038]

日本周辺の全体図である。

51. 朝鮮八道之圖 色刷 折畳中本 仙台林子平図 天明五(1785)刊 (東都 須原屋市兵衛) 1鋪 [292.1]

朝鮮半島の地図である。

52. 蝦夷國全圖 色刷 折畳中本 仙台林子平図 天明五(1785)刊 (東都 須原屋市兵衛) 1鋪 [291.1]

当時まだよく分かっていなかった蝦夷の地図である。北海道は現在の地図に比べるとかなりいびつな形をしている。

53. 無人嶋大小八十余山之圖 色刷 折畳中本 小笠原嶋の圖 仙台林子平図 天明五(1785)刊 (東都 須原屋市兵衛) 1鋪 [454.9]

現在の小笠原諸島の地図である。当時の日本ではこの島々を無人島（ブニントウ）と読んでいた。現在の英語表記の地名 BONINN ISLND はこのブニンがなまったものとして知られる。地図

はかなり正確である。延宝3年(1675)に小笠原探検をした島谷市左衛門の探検記録をもとに地図を作製したと思われる。

54. 琉球三省并三十六嶋之圖 色刷 折疊中本 仙台林子平図 天明五(1785)刊(東都 須原屋市兵衛) 1冊 [291.99]

今の沖縄県の地図である。当時の沖縄は、薩摩藩の支配を受けているが、中国に朝貢する独立王国であった。

55. 土州船・大阪船・薩州船漂流譚 佐藤霍舟写 嘉永元(1848) 1冊 [291.136]

漂流記によっても、漂流者が出会った直接の外国の様子を知ることにより、外の世界の情報を国内に入れたいと考えていた。

56. 志州船頭漂流譚 [江戸末]写 1冊 [299]

同じく宝暦7年の漂流、帰還者の記録である。

57. 漂客談奇 2巻 紅葉館鹿島氏図書記 [江戸末]写 2冊 [299]

天保12年に土佐国の漁民がアメリカに漂流し、帰還した談話の記録である。

58. 漂流珍話 絵入2巻 空斜山人 稿本(自筆) 嘉永二(1849)写 2冊 [299]

嘉永2年に漂流して日本に帰ってきた漂流者の記録である。

59. 繪本渡海物語 絵入 文行堂序 寛政十一(1799)刊(京都 箸屋儀兵衛) 2冊 [726.5]

当時の日本人が考えていた、日本の周囲の外国を回るといふ絵入りの外国紹介である。ただし、実際の観察に基づく国の紹介ではなく、不老国であったり、長人国であったり、当時の人々が持っていた荒唐無稽な伝説に基づく国々の紹介となっている。

60. 畫本異國一覽 絵入中本 五巻(欠三巻) 春光園花丸著 寛政十一(1799)刊(浪花 松本平四郎他) 4冊 [382.3]

絵は岡田玉山が筆をとり、説明の文は山東京伝が書いたとある。合計53カ国の人物画とそれへの説明からなる。江戸時代の荒唐無稽の外国人物像から、実証的な外国人へ移る過渡期の外国の人々の様子が描かれている。

**61. 阿魯舎傳信録附聘使記 彩色繪入大本 文化元年九月於路しや横文字書翰和解・莫期
哥皮亜國傳信録 [江戸末] 写 1冊 [210.59]**

文化元年に來たヲロシヤ国からの書簡の日本語翻訳の筆写本である。ヲロシヤ国の軍人の制服についての絵による解説がなされている。

**62. 異人恐怖傳 存1刊(巻上) 検夫爾原著 志筑忠雄訳 [江戸末] 刊 1冊
[291.099]**

嘉永3年(1850)に刊行された『異人恐怖伝』(木版、3巻3冊)は、元にした本が存在する。それは志筑忠雄訳「鎖国論」であり、これを写本とした出版物である。この本の前編2巻が「鎖国論」の翻刻で、後編1巻はそれを土台にした翁満の論である。そこに見られる翁満の「鎖国論」出版意図は、従来指摘されてきたようないわゆる「鎖国」政策の維持や「攘夷」運動推進のためといった理由ではなく、「西洋風」によって乱され損なわれた「和魂」の回復と確立にあった。

**63. 和蘭産物圖考 繪入存1巻(巻1) 藤元良校補 西村中和画 寛政九(1797)刊(平安
文泉堂主人林好直) 1冊 [293.493]**

著者の藤元良は伊勢出身の人である。長崎で求めた本を元にして、この本を書いたという。絵入りの世界地誌書ともいうべきものである。

**64. ケンペル『日本誌』(De Beschryving van Japan) 繪入 特大本 Door
Engelbert Kaempfer. Amsterdam, Jan Roman de Jonge, 1733. [302.1]**

ケンペル(Kampfer, Engelbert, 1651-1716)はドイツの博物学者で医者であった人物で東インド会社の医官として来日した。元禄年間に2度オランダ商館長に随行して江戸へ旅行した。彼が観察した日本の姿や、周りの人や患者からも日本についての実際の知識を得て、帰国後に日本について書いた書物である。この本は長い間日本について、観察に基づく書籍としてヨーロッパで重要な役割を果たした。英語版が1728年に出版され、オランダ版フランス版が翌1929年に出版された。これはオランダ版である。

**65. 西洋事情 福沢諭吉 2編 一名西洋旅案内 附録萬国商法 2巻 美濃半截判
慶応三(1867)自序刊 2冊 [293.09]**

アメリカとヨーロッパに滞在した経験から、江戸時代末のこの時期に福沢諭吉は西洋紹介のこの本を執筆した。この本は江戸時代終わりの日本の知識人に日本の行く末を考える議論を引き起こした。正式の出版だけでも、15万部を出版したというから、当時の日本人にどのように受け入れられたかが分かる。

**66. 世界國盡 繪入6巻(5巻 附録1巻) 福沢諭吉訳述 明治四(1871)刊(慶應義塾蔵
版) 6冊 [290.1]**

世界の国名や人口をあげている世界の地誌である。その中で大日本皇国は人口3500万人であると記されている。世界地理を、江戸時代の寺子屋での手習いの手本に用いられた往来物にならない、

方角・地名などを挙げ、各地の風俗歴史などの概略を述べたものである。旧式の暗記もの教育に文明開化の基礎知識を導入しようとした訳編者の意図は図に当り、初期の小学校教科書として広く採用され、大いに普及した。

**67. [万国地誌] 和蘭の原書より訳したもの 存3巻(巻1・2・3) 安政三(1856)写
3冊 [290.1]**

世界各地の地誌を記述したもの。手で移した筆写本である。ヨーロッパやアジアの国々を取りあげている。

**68. 長崎間見録 絵入5巻(巻1欠) 広川獬 寛政十二(1800)刊(京都 林伊兵衛) 4冊
[291.93]**

著者の広川獬は京都の蘭方医で、華頂親王の侍医を務めていた。阿波出身である。寛政2年(1790)と7年(1795)の2回、長崎にそれぞれ3年間滞在している。本書には、著者がその間に見聞きした長崎の祭や動植物のほか、外国の風物等が挿絵入りで記されている。著者が医師であっただけに「紅毛人外科箱の図」は、特に念入りに描かれている。

**69. 海國圖志 林則徐譯 魏源重輯 鹽谷宕陰等校 普魯社国 津山文庫蔵印 安政二
(1855)刊(江都 須原屋伊八) [293.34]**

中国清時代の思想家魏源(字は默深、1794~1857)が著した、世界の事情を中国から見た書物である。この本の中でも「籌海篇」が重要部分であり、外国の侮辱に抵抗する戦略・戦術を論述し、「外国の特技に学んで外国を制する」という著名な戦略思想を提出している。とはいえ同時に、一群の兵器の製造に関する兵書と図文を集録し、あわせて中国のアヘン戦争以後に研究され模造された外国の先進的な武器について獲得した成果を豊富に紹介している。日本においても西洋研究の一書として読まれた本である。

**70. 輿地便覧 外国奉行岩瀬忠震稿本 罫紙 鷗所鈞隱 安政六(1859)写(自筆) 1冊
[290.3]**

外国奉行岩瀬忠震が書いた、世界知識を国ごとに示した書籍「輿地便覧」を手書きで筆写した本である。このようにして、当時の日本人にとって大切な知識はコピーされて日本人に広まっていったと思われる。岩瀬忠震(1818~61文政元~文久元)は開国論を唱えた幕臣である。

**71. 地学初歩 Cornell's primary geography, for the use of schools. 色刷 地図入
英文 和装本 初版 コルネル氏著[江戸末]刊(江戸渡部氏蔵版) 1冊 [290.1]**

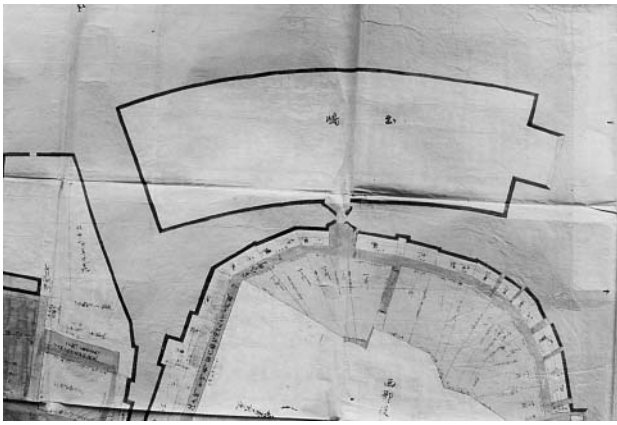
英語の地理読本である。そのまま江戸で翻刻されたことが裏表紙の出版地に EDO と書かれていることより分かる。

72. [地学初歩] Cornell's primary geography, for the use of schools. 色刷 地図
入 英文 和装本 初版 慶応二(1866)刊 (江戸) 1冊 [290.1]

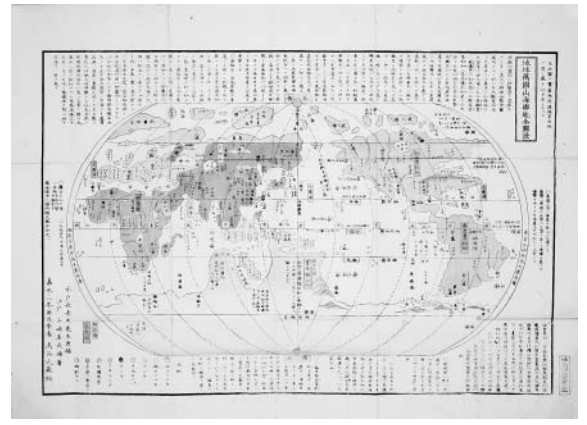
上記の全く同じ内容の本であるが、日本で版木を作り、同じものを出版した複製版である。オランダ語に代わる言語として英語の重要性を思う日本人が多くいたことを想像させる。

IX. 当時の絵画出版物

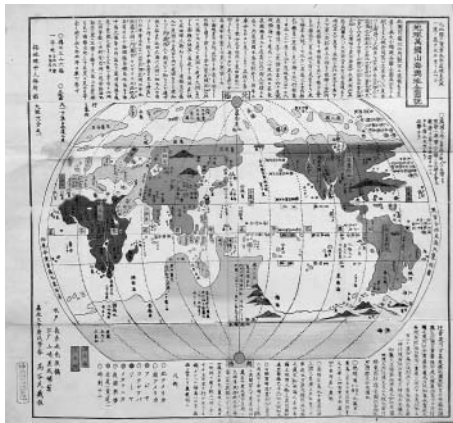
73. 大象写生図 一雲齋芳形画 佐野屋富五郎 刊 36×25cm 3枚
74. 合衆国人物蒸気船圖繪 色刷 江戸末刊 37×51cm 1枚
75. 異人屋敷料理之圖 一川芳員画 刊 36×24cm 1枚
76. [諸國異人圖] 一惠齋芳幾画 彫竹 馬喰本屋 刊 37×25cm 1枚
77. 阿蘭陀船圖 文錦堂刊 35×25cm 1枚



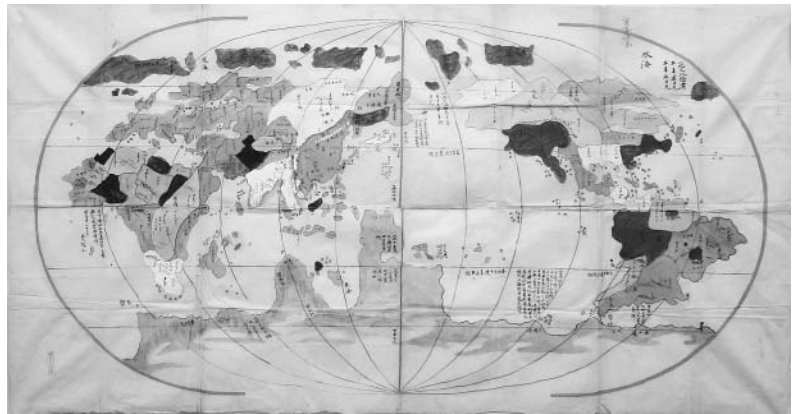
1 長崎市中地割繪圖(部分)



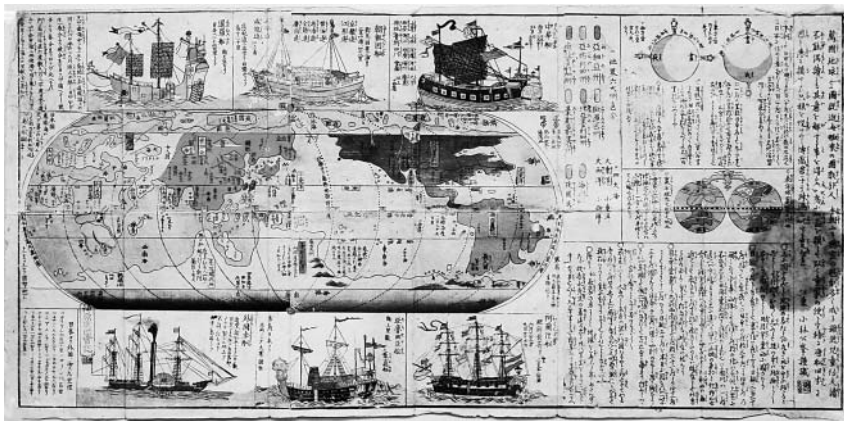
2 地球萬國山海輿地全圖說



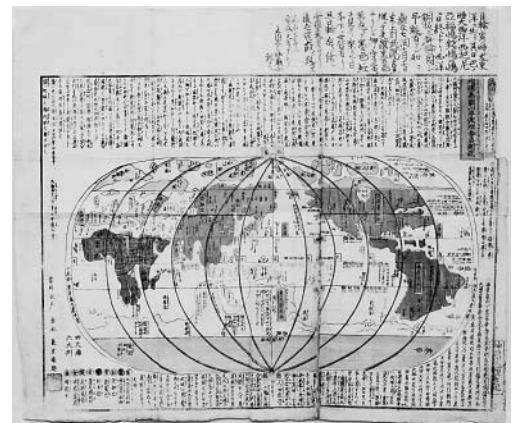
3 地球萬國山海輿地全圖說



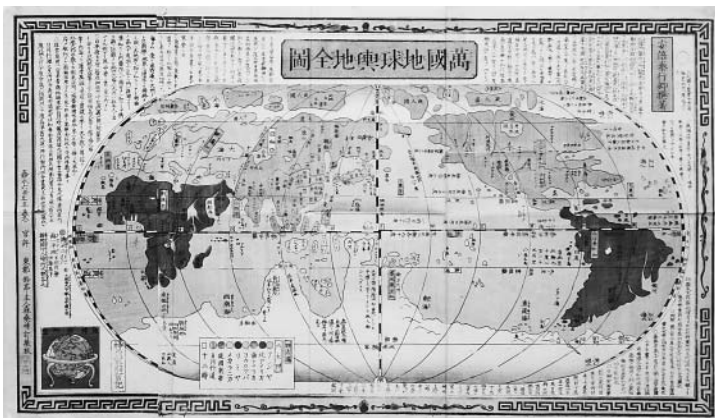
4 萬国地図



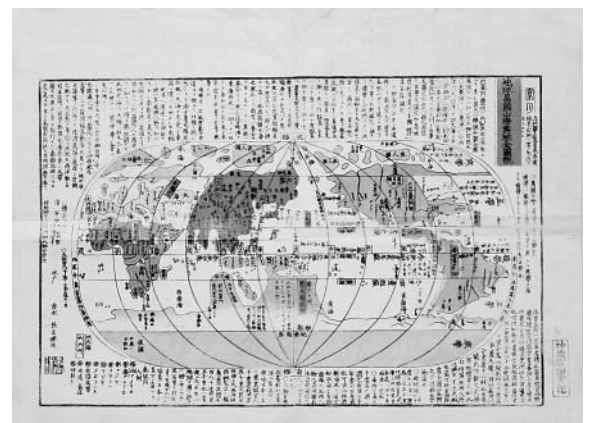
6 萬國地球全圖說



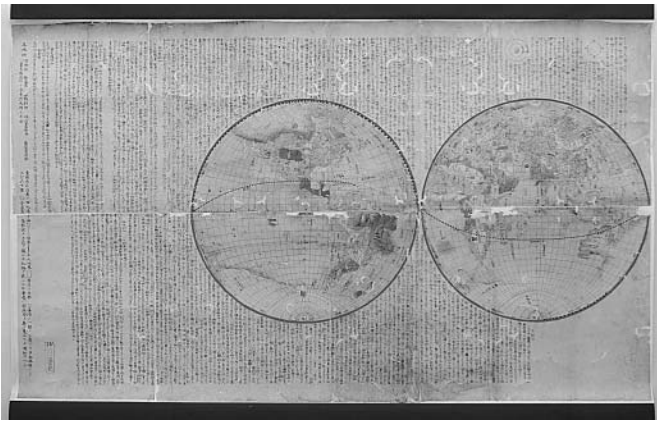
7 地球萬國山海輿地全真圖說



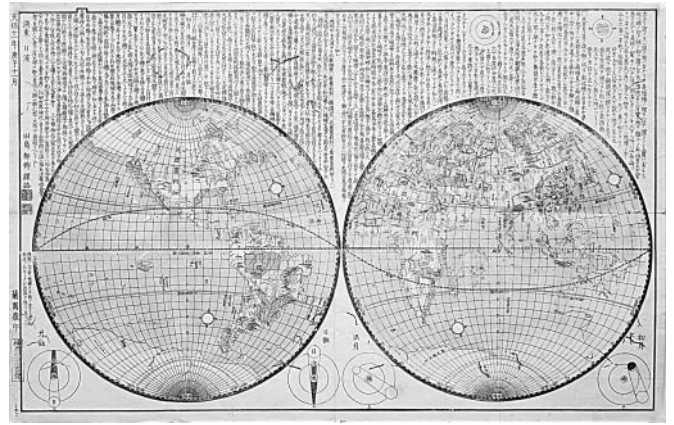
5 萬國地球輿地全圖



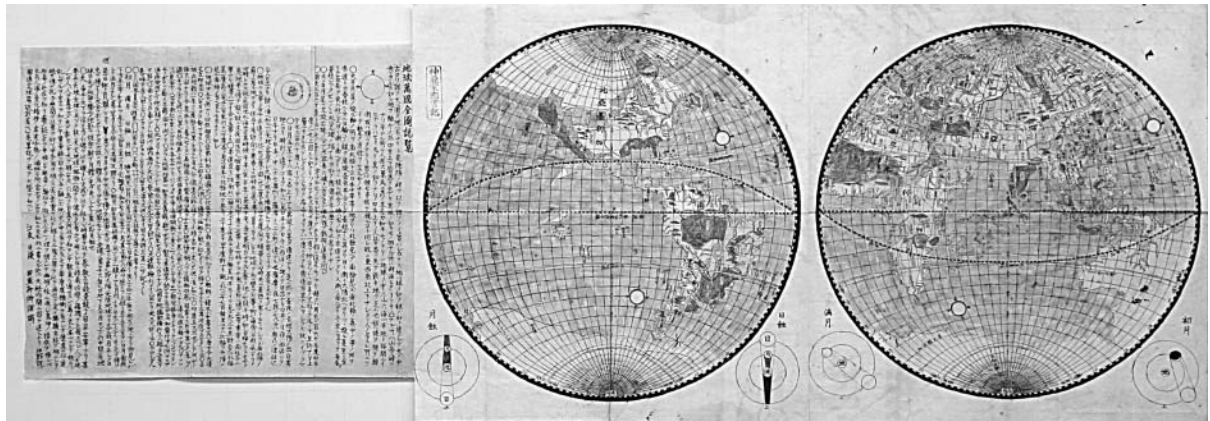
8 地球萬國山海輿地全圖說



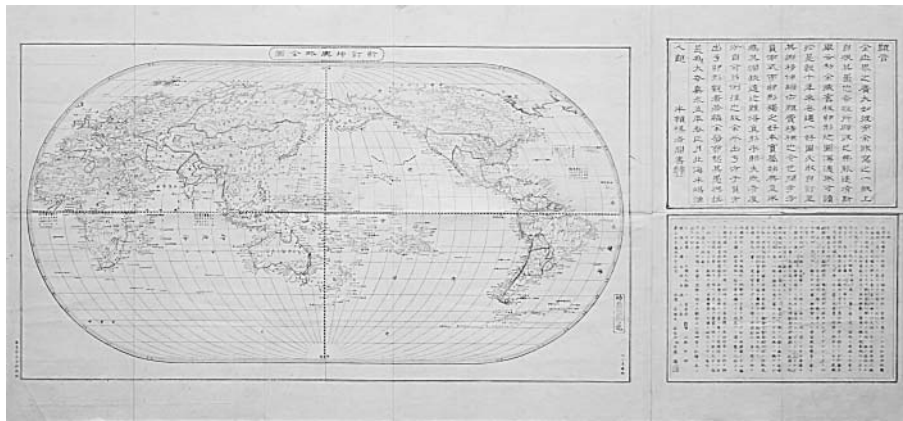
9 「荷蘭新訊地球全圖」の写本



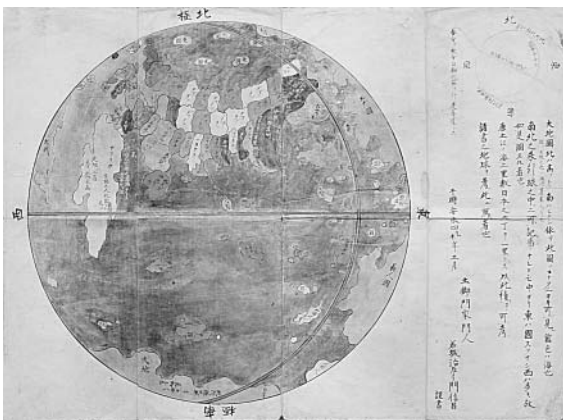
10 和蘭地球全圖



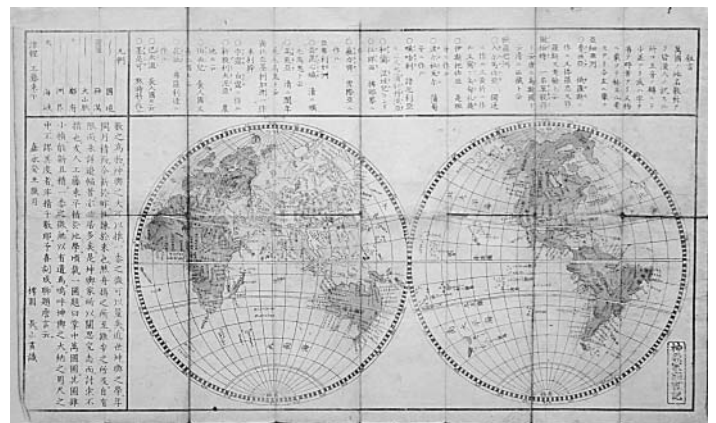
11 地球萬國全圖説覽



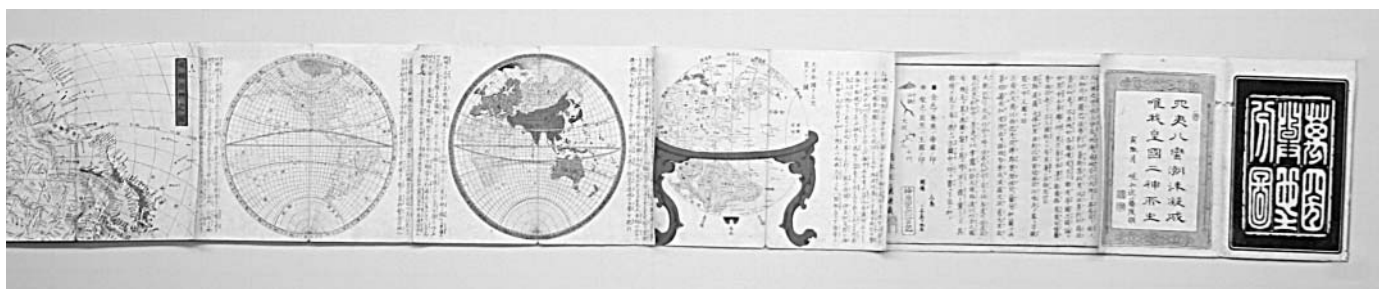
12 新訂坤輿略全圖



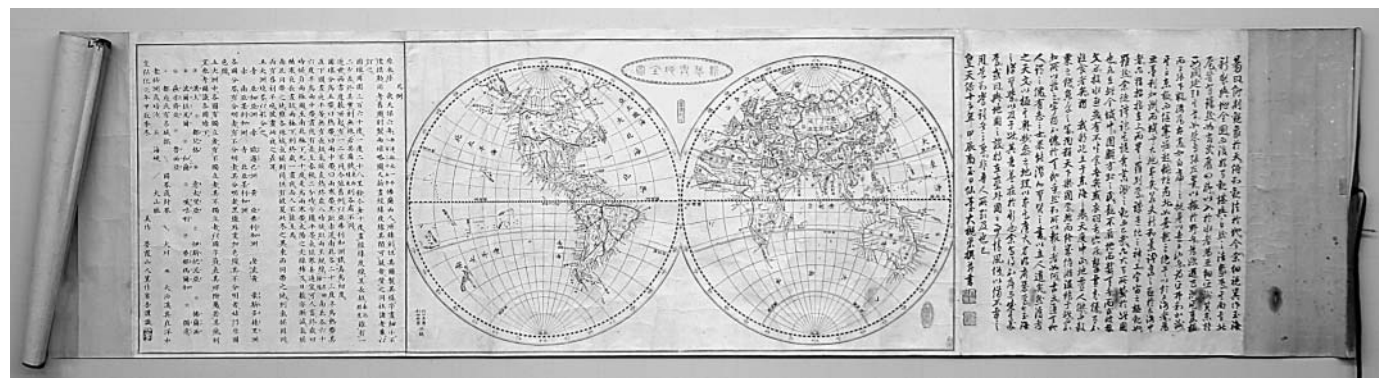
13 世界地図



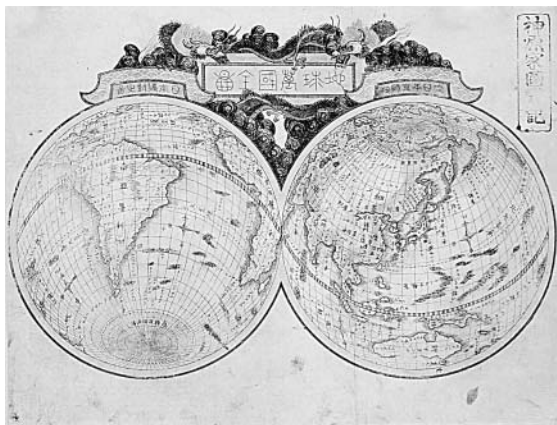
14 掌中萬國圖



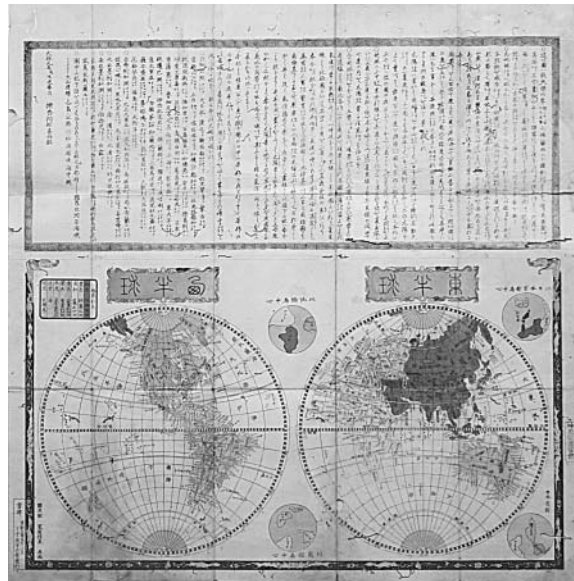
15 萬國輿地分圖



17 新製輿地全圖



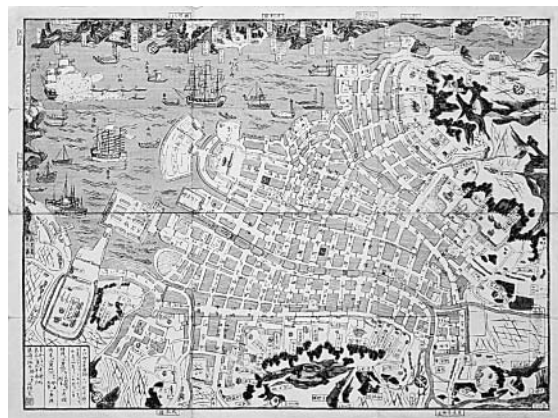
16 地球萬國全圖



18 東西半球世界地圖



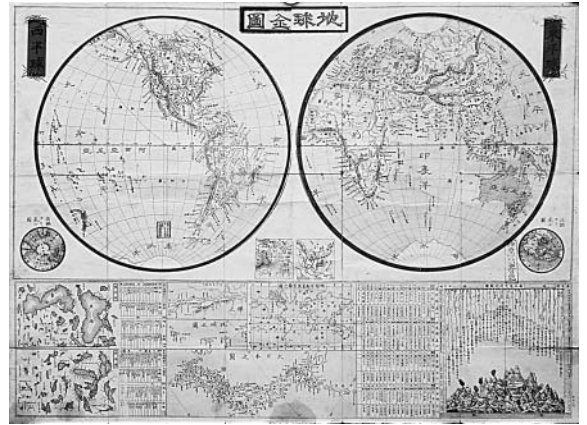
19 肥前長寄圖



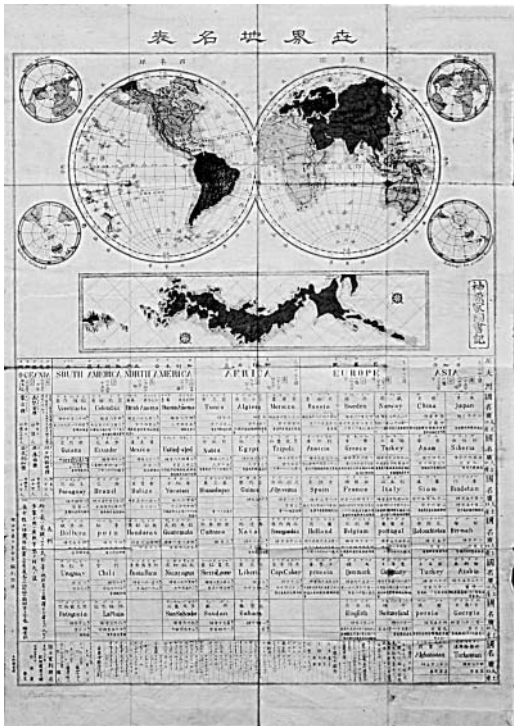
20 長崎細見之圖



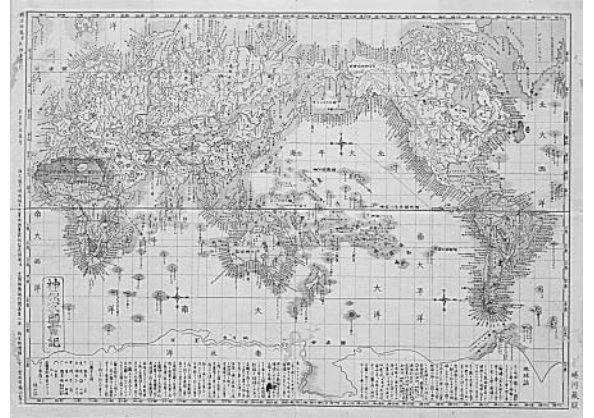
21 長崎居留場全圖



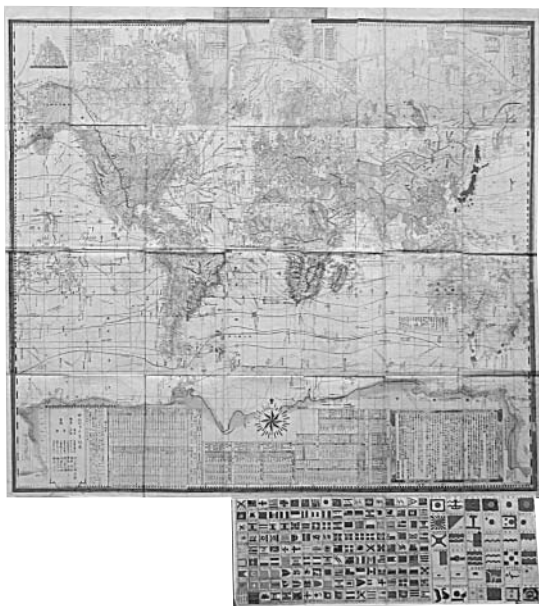
22 地球全圖



23 銅刻世界地名表



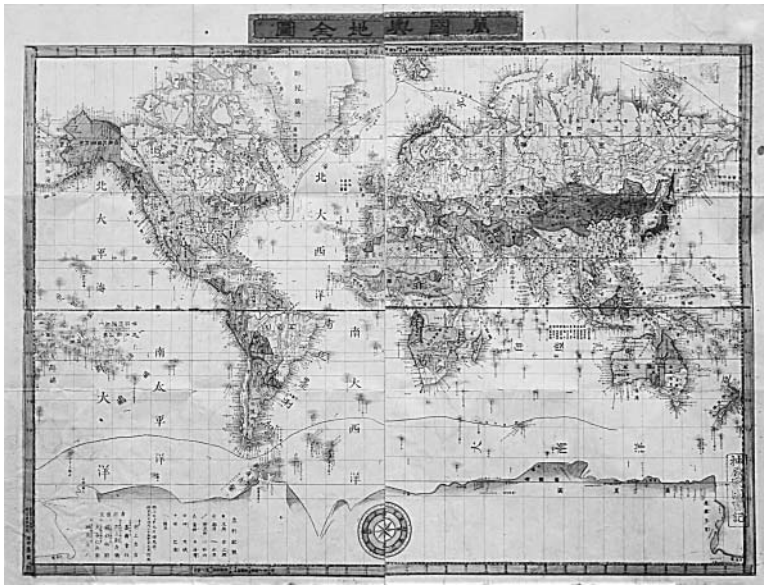
24 銅鑄萬國輿地方圖



26 銅鑄新刻萬國輿地全圖



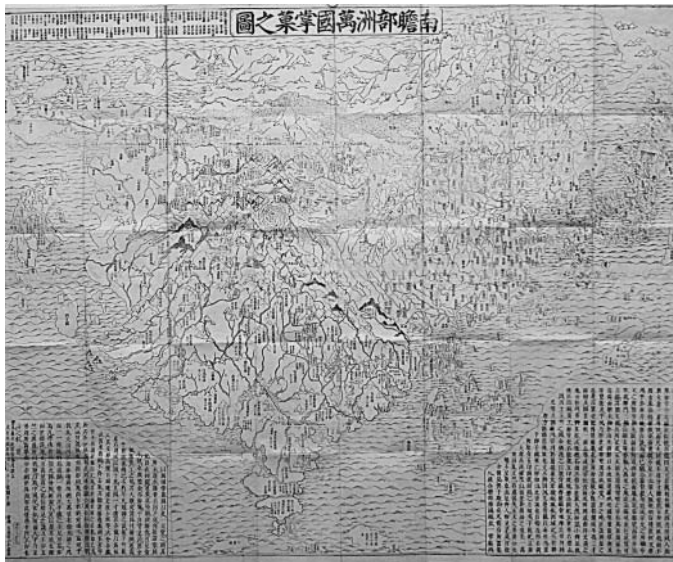
25 地球萬國方圖



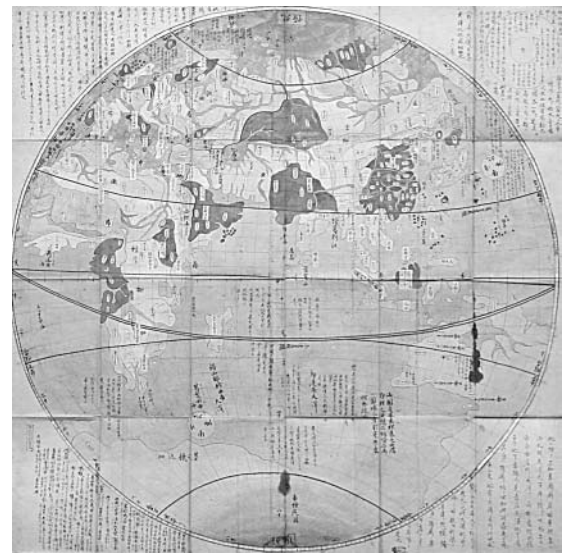
27 萬國輿地全圖



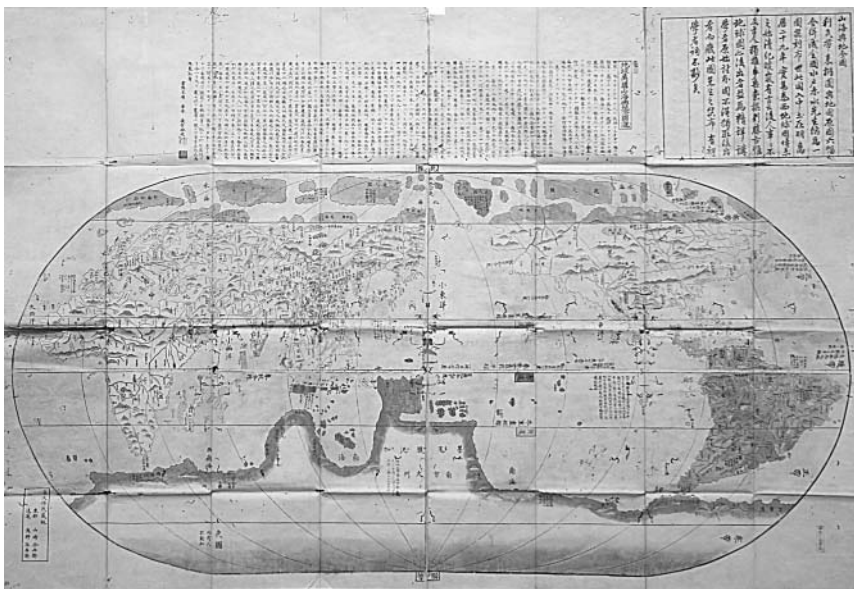
28 官許大屋愷故譯射号萬國地圖(東部)



29 南瞻部洲萬國掌葉之圖



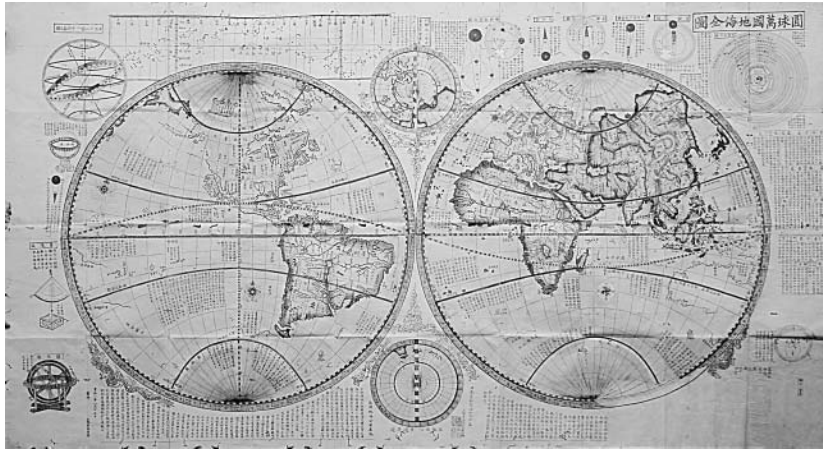
30 新訊地球周細覽



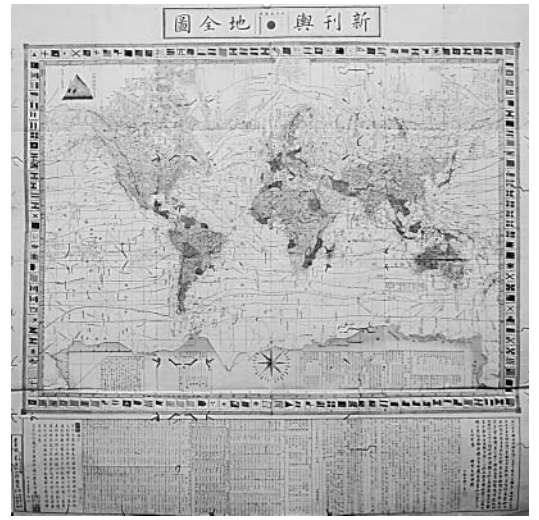
31 地球萬國山海輿地全圖說



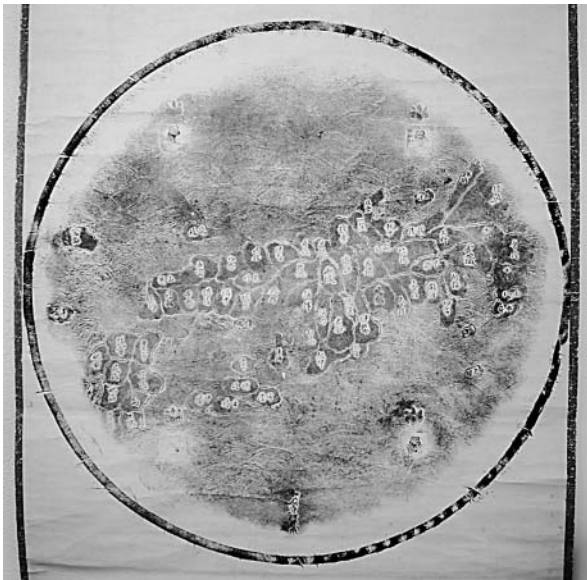
32 新撰日本地圖



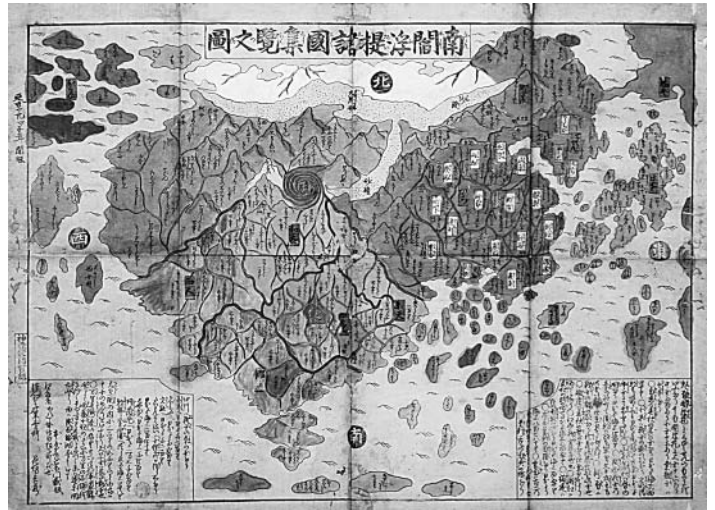
33 圓球萬國地海全圖



34 新刊輿地全圖



35 日本古圖



36 南閩浮提諸國集覽之圖



37 教國畫道具集



38 世界國畫



39 蘭人遊宴之圖

大正九年長崎図書館刊皇太子殿下台見對外史料目錄
 蘭人遊宴の板畫 一枚
 林手書常て出島蘭館に招かれ饗應せられたる時の実景と
 自筆せるおなるとさふ、席中一脚の空椅子あり是も太子自ら
 の立ち所なるも輝る所ありて故意に畫せりたりと
 と見えたり

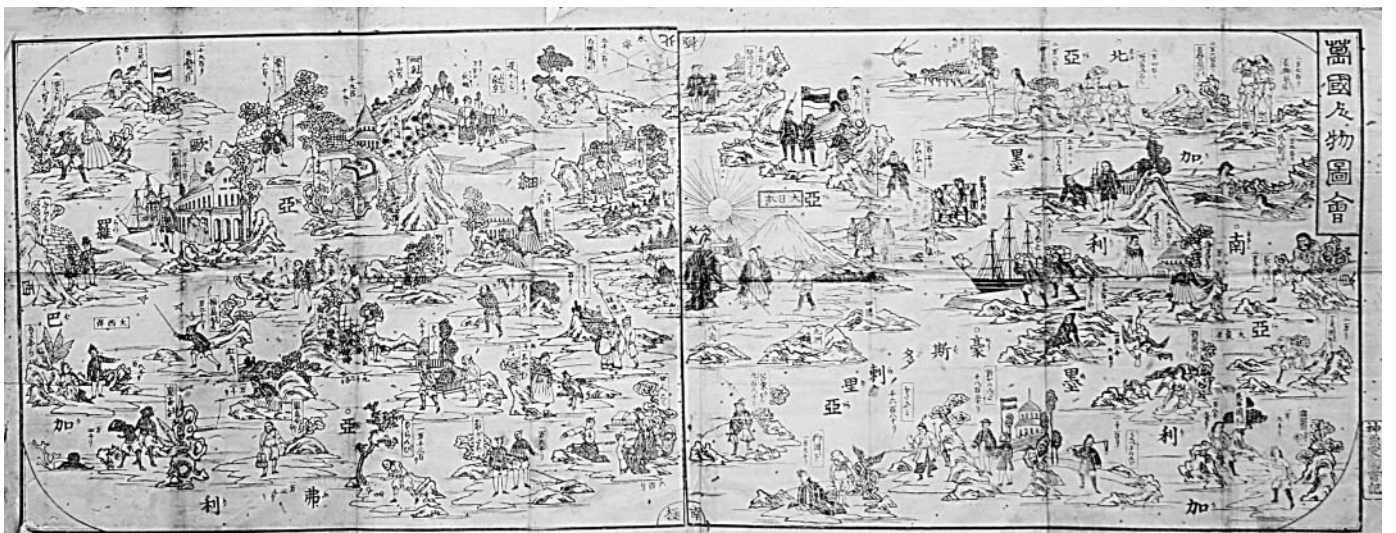
神原甚造先生自筆覚書



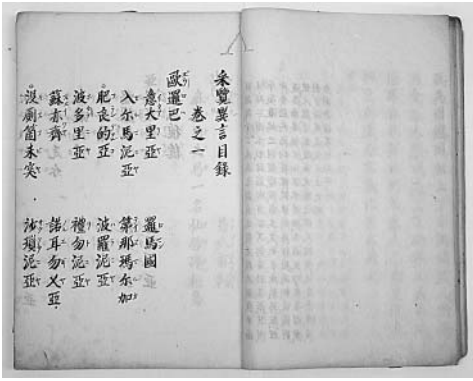
41 萬國一覽



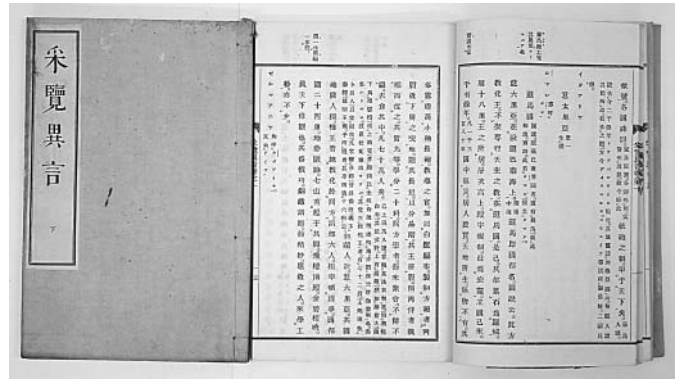
42 萬國里數鑑



40 萬國人物圖會



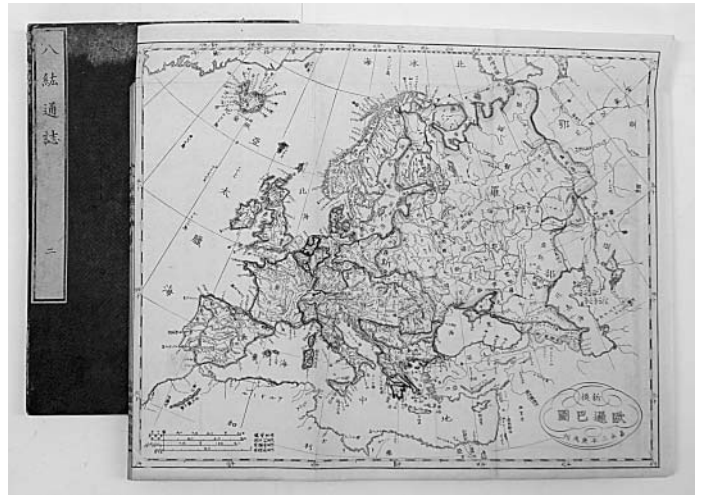
43 采覽異言



45 采覽異言



44 采覽異言



47 八紘通誌



46 環海異聞



48 瀛環志略



49 三國通覽圖說



50 三國通覽輿地路程全圖



51 朝鮮八道之圖



52 蝦夷國全圖



53 無人島大小八十餘山之圖

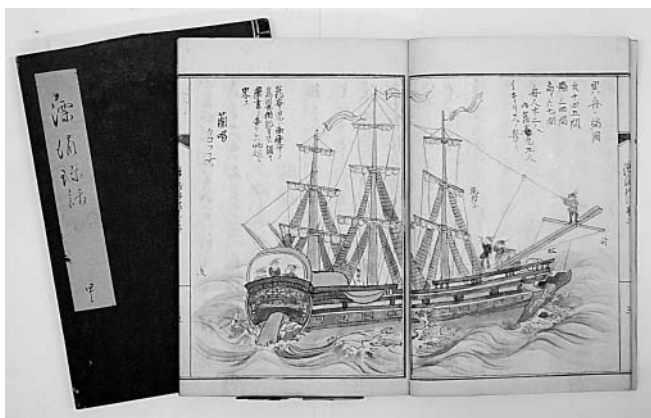


54 琉球三省并三十六嶋之圖



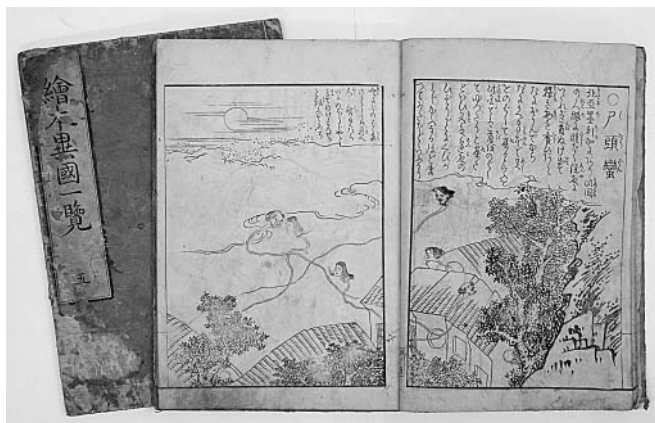
55 土州船・大阪船・薩州船漂流譚 56 志州船頭漂流譚

57 漂客談奇



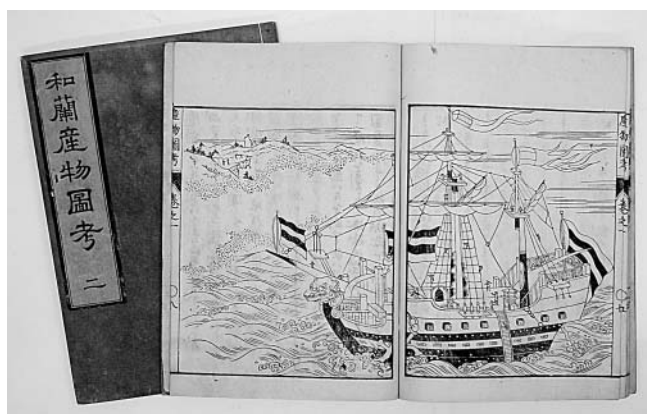
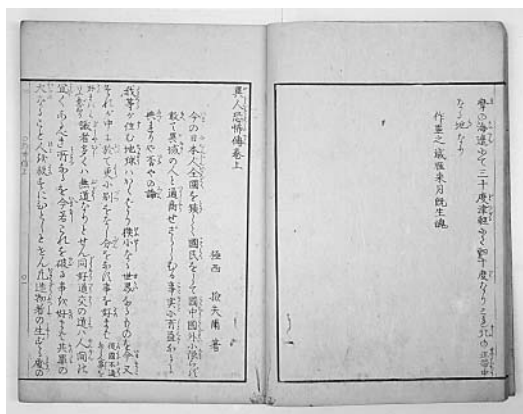
58 漂流珍話

59 繪本渡海物語



60 畫本異國一覽

61 阿魯舍傳信録附聘使記

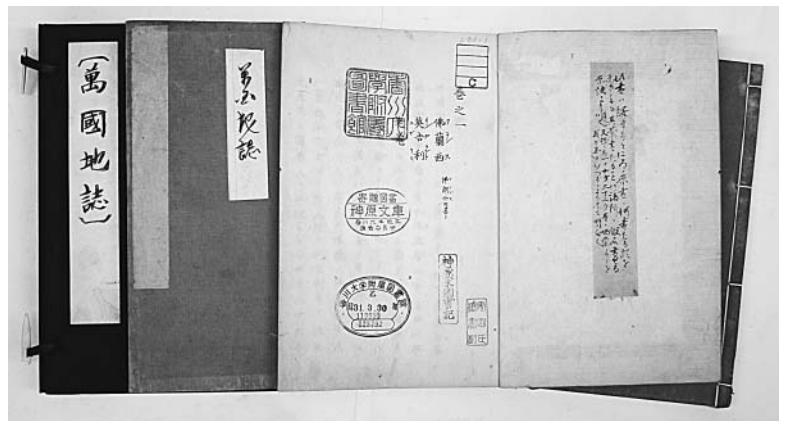


62 異人恐怖傳

63 和蘭產物圖考



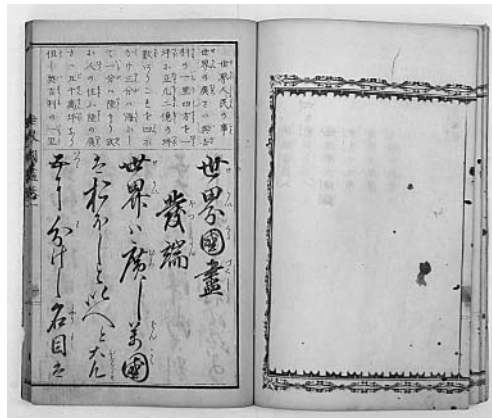
64 ケンペル『日本誌』
De Beschryving van Japan.



67 万国地誌



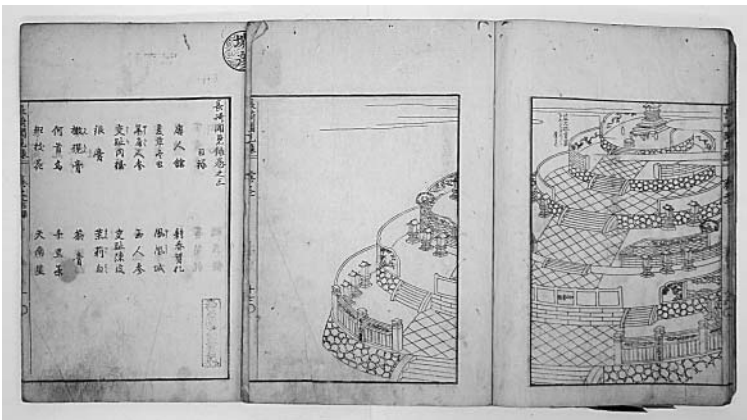
65 西洋事情



66 世界国畫



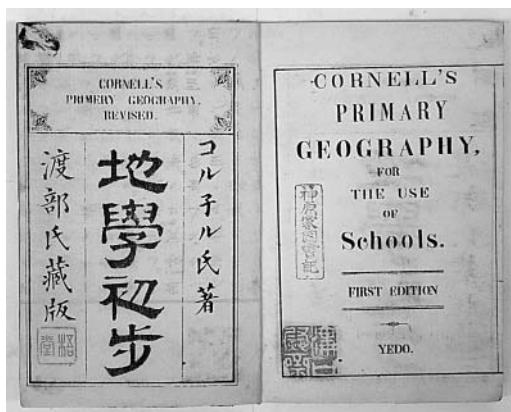
69 海國圖志



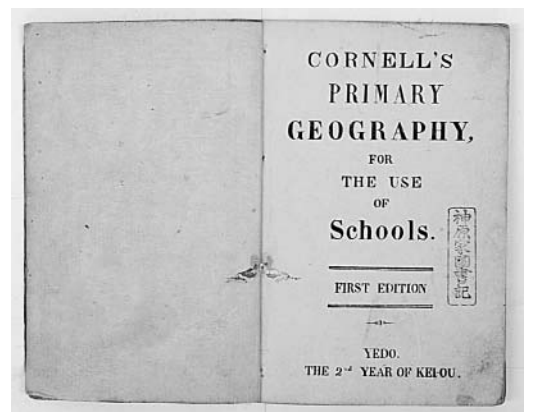
68 長崎聞見録



70 輿地便覧



71 地学初歩



72 地学初歩

香川大学附属図書館一般公開行事【神原文庫資料展】開催一覧

- ◆第1回 神原文庫洋学資料展 「啓蒙の源流」
平成7年11月5日(日)～12日(日)
- ◆第2回 神原文庫洋学資料展 「近代の受容 一蘭学から英学へ」
平成8年11月3日(日)～10日(日)
- ◆第3回 神原文庫古文書展 「中世の武家文書」
平成9年11月2日(日)～9日(日)
- ◆第4回 神原文庫資料展 「幕末・明治初頭の新聞・雑誌 一ジャーナリズムのあけぼの」
平成10年11月1日(日)～8日(日)
- ◆第5回 神原文庫資料展 「繪本 一江戸庶民の愛したビジュアル・メディア」
平成11年10月31日(日)～11月3日(水)
- ◆第6回 神原文庫資料展 「開国と文明開化 一その社会と言語」
平成12年10月29日(日)～11月5日(日)
- ◆第7回 神原文庫資料展 「創刊号雑誌コレクション 一時代を映す「かがみ」」
平成13年10月28日(日)～11月4日(日)
- ◆第8回 神原文庫資料展 「日本における近代社会の成立 一欧米に追いつき追い越せ」
平成14年10月27日(日)～11月3日(日)
- ◆第9回 神原文庫資料展 「日本のうたごころ 一神原文庫の歌書」
平成15年10月25日(土)～11月2日(日)
- ◆第10回 「神原文庫」名品展 —— 神原甚造旧香川大学初代学長没後五十年記念
平成16年10月23日(土)～31日(日)
- ◆第11回 神原文庫資料展 「明治初期、巷の事件はどう伝えられたか 一新聞錦絵にみる世情」
平成17年10月30日(日)～11月6日(日)

神原文庫資料展実行委員会委員

委員長	理事(副学長)(学術担当)・附属図書館長		前田 肇
委員	教育学部	教授	西山 弘子
委員	法学部	助教授	石井 一也
委員	経済学部	教授	稲田 道彦
委員	医学部	教授	大森 美津子
委員	工学部	教授	高本 喜一
委員	学部	教授	麻田 恭彦

平成18年10月発行

展示品 構成・解説 稲田 道彦

編集・発行 香川大学附属図書館

大正九年長崎図書館刊皇太子殿下台覧対外史料目録
 蘭人遊宴の板畫 一枚
 林子平嘗て出島蘭館に招られ御食應せられたる時の實景を
 自ら寫せられたるものと云ふ。當中一脚の空椅子あり是も林子平自ら
 の所ちも輝る所ありて故意に畫がきりしなりと云
 と見えたり



表表紙写真上左 高木正勝,西野古海「新撰日本地圖」 明治九(1876)十河存種
 上中 「長崎居留場全圖」 慶応二(1866)長崎隣璽堂
 上右 福沢諭吉「西洋事情」(一名「西洋旅案内」) 慶応三(1867)
 下 「長崎細見之圖」 嘉永四(1851)改鐫 長崎文錦堂
 裏表紙写真上 神原甚造先生自筆覚書
 下 「蘭人遊宴之圖」掛軸 安永七(1778)年仮名曆摺本を付す